

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372301046		
法人名	社会福祉法人 伸生紀		
事業所名	グループホーム こもれび		
所在地	熊本県下益城郡美里町佐俣388		
自己評価作成日	平成25年12月25日	評価結果市町村受理日	平成26年3月12日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市水前寺6丁目41-5		
訪問調査日	平成26年1月21日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホームが開設され10年目を迎えました。毎年大きく変化することはありませんが、入居者の方々が同じ屋根の下で過ごしているという意識が強く見られた年でした。様々な場面で他者を気遣われる様子や「トランプしよ。」とご利用者自ら誘いの声掛けをされるなど今までになかった風景がみられています。自然な流れができていのように感じられます。地域の方より自家製の野菜を持って来られたり、そーめん流しの竹を準備いただくなど、その心遣いが嬉しく、年々少しづつではありますが、地域との関わりが深まっていると思います。地域への雑巾配布は継続的に行っています。認知症の理解や技能面において知識習得が必要な場面が見受けられますが、声掛けや対応の仕方をみなで考え、全職員、職場内外の研修に積極的に参加できるようにし、質の向上に努めています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

入居者と職員が、一つ屋根の下で暮らす家族のような温かみのあるホームである。日常の暮らしの中で「何もすることが無い日」と言うのは無く、リビングでは貼り絵や塗り絵等の制作活動や、干し柿作りをしたり、カルタやトランプを楽しんだり、時には敷地内の草取りと、その人のできる事に合わせた支援が行われている。介護度の高い人には職員が寄り添い、一人にしない配慮も見られて、リビングは賑やかで利用者の表情は明るく、安心してくつろげる場が自然な形で提供されている。又、開設10年目を迎え、区長はじめ地域住民の理解も深まっており、今年度からは管理者が地域の女性消防団員として受け入れられたことで、防災面での協力体制の強化も期待できる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を朝の申し送り時に唱和し、理念を基に立てた各自の目標を念頭に「今日の仕事の目標」を他職員を前に公言することで理念の確認と実践へ繋がるような環境作りをしている。	法人は「誠実と笑顔」「安心と安全」「地域社会の信頼」を大切にするという三つをホームの運営理念としている。毎朝申し送りの時日常のケアを振り返り、食事介助の時の声かけや、お茶の勧め方、レクレーションを楽しく等、その日の目標を他職員の前で発表してケアの統一を図り、実践につなげる努力が見られた。その効果は少しずつ表れており、利用者の安心と笑顔に反映されている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域との日常的な交流といわれると、まだ隔たりがある暮らしと思われる。しかし、昨年と比較すると老人会の清掃作業に参加したり地元の祭りにも参加できたことはよかった。	不定期ではあるが、「地域交流会」として歌や踊りのボランティアの受け入れや、地元の人達とみょうが饅頭、巻き寿司、だご汁等と一緒に作る「料理交流会」は入居者に喜ばれると共に、ホームへの理解に繋がっている。又、今年度管理者が老人会の清掃作業に参加する等して、地域との距離が縮まった。年末には法人として、消防団に「夜警見舞い」を届けたり管理者が、女性消防団員を引き受けたり、積極的に地域に溶け込む努力が見られた。	老人会との交流が出来た事を受けて、会長に「運営推進会議」への委員要請をするのも良いと思われる。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症サポーター養成講座へ参加し、認知症への理解と支援ができるようにキャラバンメイトとして活動している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	だいたい会議形式で通常はすすめているが、11月の推進会議では「おはぎ作り」をご利用者と共に参加メンバーの方も一緒におやつとして食べていただいた。普段の様子そのままを実際に見ていただくことができてよかった。	委員は行政・社協・民生委員・区長・家族で構成され、2か月に1度開催されている。会議ではホームの活動報告と、転倒事例・家族の様子・避難訓練等の現況報告が行われた後、各委員から活発な意見が出されている。又、避難訓練の日に合わせて推進会議を開いたり、会議当日に入居者と委員と一緒に「おはぎ作り」をする等で、委員に入居者の日常を見てもらうという試みもなされており、通常の会議とは異なった交流が出来、委員の理解が深まっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	入院状況や転倒などあったことの情報提供を行っている。他行政では空室状況の報告義務があるとのことだが、我が町ではそのようなことはない。	運営推進会議を利用して、町担当者も入居者と一緒に「おはぎ作り」をしてもらう事で利用者の暮らしぶりを見てもらう事が出来、ホームへの理解に繋げている。入院や転倒事例等の報告や情報提供の他、加算の問題等分かりにくいことは、役場に出向いて相談しており、必要に応じて行政との連携を図っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の研修は職場内でも開催している。ご家族様から転倒防止に4点柵の設置を申し出られたこともあったが、施設の方針として行わないことを理解いただき、職員への対応で行っていく旨を設営した経緯もある。	法人の「リスクマネジメント委員会」に管理者が出席して、全職員に周知している。家族から、転倒防止柵利用の申し出があったが、それは「身体拘束」に当たる事を理解してもらい、見守りの強化と衝撃吸収マットで対応を図っている。夜間はセンサーマットや、寝具に付けた鈴の音で気配を察知し、転倒リスク回避に力を入れ、身体拘束は行わないことを徹底している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職場内研修を受けたり、声掛けでも虐待になる可能性があることも普段より職員には話している。 職員のストレスが溜まらないように声掛けを行うように努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	実際に後見制度を活用中の方がおられる。リーガルサポート主催の研修会に参加したり、ご本人の希望があり不明な点があれば担当司法書士への相談を随時行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入退居時に内容説明を行っている。契約以降に疑問点などあれば、その都度対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご利用者からの希望、要望には出来る限り対応するように努めていると共に運営推進会議や担当者会議、面会時を活用し把握し努めるようにしている。	行事を通して、家族との交流を図っていたが、今回、初めて行事以外の日に「家族と職員との交流会」を開催。ホームではなく、別に場所を設けての「懇親会」で入居者の暮らしぶりを撮ったDVDを観る等、家族同志や家族と若い職員との信頼関係を深める工夫が見られた。その後、家族から年末の大掃除の手伝いの申し出があったり、面会時、家族同志が親しく語り合うようになる等、意見や要望が言い易い関係作りができています。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のミーティングで各職員が発言できる場を設けている。それと共に日常の中でも気づきがあればその場で意見を出し合ったり上司への報告、相談も行い反映できる環境を作っている。	管理者はケアマネ兼務で、全職員から入居者の暮らしぶりや問題点、ケアでの気づきを日常的に聞いて対応に当たっている。職員同志も夜勤の時の様子や、介助の工夫点を出し合い、個々の入居者が居心地良く過ごせるよう心掛けている。職員の工夫で入居者の浮腫対策として、ダンボール箱をきれいな布でくるんだ足乗せが作られており、ゆっくりと足を伸ばして座っている入居者の姿が見られた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境条件の整備に努めている	上司と面談しながら上半期下半期と各職員が個人目標設定し、それに向けて仕事を行っている。円滑に仕事が流れ、勤務時間内に終了ができるように皆で話し合いながら業務を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各職員の経験や力量に合わせた外部研修への派遣や職場内研修を2ヶ月1回行い知識の向上に努めている。現場では、その時のタイミングを逃さないように各職員には声掛けを行うよう努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	宇城地区ブロック会での勉強会に自主的に参加することで、他事業所の職員との顔合わせもでき、質の向上に繋がっている。しかし、職員の積極性に差が出ていることも否めない事実である。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の面談や情報収集を行った上で対応を検討する。他者を交えての会話やご本人の気持ちの確認を行いながら作業提供をし徐々に生活に慣れていただく。それと共に様子観察することで気持ちの把握に努め対応できることは直ちに行いながら安心を確保できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の面会や連絡、施設の見学を行ったり、入居間もない頃に家族へ「連れて帰ってくれ」との訴えある時は、ご家族へ声掛け行い、悩みの気持ちの軽減に努めている。お気持ちの表出が無い時は会話を通し要望が出やすい環境を作るように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	担当ケアマネや看護との面談を通し情報収集を行い、なるべくスムーズに入居生活に行こうしていただけるような環境を作っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員とご利用者という垣根を感じさせないように、しかし声掛けや対応には規律を持って自然体で関わるように努め、洗濯や食材切りなど出来ることは共同で行うことでお互いの距離が縮まっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご本人様の希望に応じ、受診や必要物品を持って来ていただくなど、ご家族様の支援を仰ぎながら面会にも繋がるよう連携できるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	以前は馴染の美容室へ通う方もおられたが、現在は体調不良から施設での対応になっている。馴染の方が入居やデイサービスを利用されている場合はタイミングを見ながら会う機会を作っている。	入居者の認知度、介護度により、馴染みの人や場所との関係継続が難しくなっている現状である。法人のデイサービスを利用している馴染みの人の所へ出向たり、できるだけ家族の面会の機会を多く持てるような働きかけをする等、本人がホーム内だけの人間関係にならないような工夫が見られた。	馴染みの人や場所については、情報把握にもう少し積極的なアプローチが必要ではないかと思われる。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	席の配置は各々のご利用者に定着しており、心地良い場所で過ごされている。自室で長く過ごされる方へも意思を確認しながら皆様と過ごされる環境作りを行なっているところだが、声掛けの機会がまだまだ少ないようだ。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	5年前に退居し医療機関に入院された方が今年亡くられたが、退居から亡くられた以降もそのご家族との交流が継続的にある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご自分の意思を発することができる方へは、対応可能な事案では直ちに対応するようにしており、訴えることが苦手な方においては普段の様子から汲み取るよう努めている。意思確認困難な方は、ご家族からの情報を基に対応し、真意がなかなか掴みにくいご利用者は、行動や発語から汲み取るように努めている。	職員は入浴介助の時や夜間、本人と二人きりでお茶を楽しむひと時等に、本音を聞き出すように努めている。また、入居者同志の会話や面会時の家族との会話からの気付きもあり、思いや意向に沿う支援がなされていた。自分の病状が不安で受診したいという思いを受け止め、医師に相談したり、食事形態が他の人と違う事への不満が投げかけられ、咀嚼や嚥下の在り方を説明して納得してもらうよう時間をかけた対応が見られた。困難な場合は、家族に聞いたり、生活歴を見直して本人の希望に応える努力をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人より話が聞ける場合は、会話やコミュニケーションの中から把握するようにし、ご家族からも情報収集を行いながら、生活歴や好みの事(物)を把握できるようにしている。サービス利用の経過ではケアマネ等へも確認するようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活の中でコミュニケーションや普段の様子から心身の状態を把握し、介助者が手を出しすぎない支援を心がけ本人の有する力を発揮できるようにし現状把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	個人の課題があれば日々の生活の中での気づきやミーティングで情報交換し検討を行っている。利用者別の担当者にアセスメントシートを配布し、担当を核として状態把握を行い、ケアマネとの連携と担当者会等で相談しケアプランへと繋げるようにしている。	入居者毎に担当制をとっており、夜間帯の様子や、普段の会話の中からの気づき等をアセスメントシートに記入。生活記録を基に担当者会議を開き、家族の意見や要望を取り入れたケアプランが作成されている。プランの見直しは半年毎としているが、入院や転倒等、変化があった場合はその都度適切なプラン変更でその時の最良のケアプランになるよう心掛けている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ご利用者の状態は経過記録に記入し、その時の状況や対応はその場で話し合ったり申し送りノートで情報の共有を行いながらプラン見直しに繋げている。しかし、気づきの点を話し合いのみで終わったり一人だけ感じ記録に残っていない等、後へ繋がらない部分も多く見られ改善していく必要あり。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	併設のデイサービスに希望あれば遊びに行かれたり、食事摂取に変化がある時には、それぞれのご利用者に合わせ管理栄養士と連携し提供を行うなどの対応をしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣住民の方が自家製野菜を持って来られたもので食事を作ることもある。運営推進会議時にそうめん流しの話題が出ると地元区長さんより竹の提供を打診され、竹山と一緒に出向きいただいた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本としては、入居前の主治医に診ていただけのようにしている。協力医療機関より2週間に1回、往診をされるため入居時にご本人、ご家族へ相談しながら納得を得られれば対応をしている。	入居前からのかかりつけ医が継続され、希望によって往診を受けている。家族と共に定期受診に行く入居者もあり、本人・家族の意向に沿った医療支援となっている。家族の希望で職員が付き添う場合は、受診前の症状と、受診後の結果を報告し、家族の安心を得ている。病状に変化があった場合は家族に同行を依頼し、スムーズな受診支援が出来ている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	施設看護責任者を中心に情報提供を行い、ご利用者の身体把握をしていただいている。上長の係長も看護であり他部署の看護とも連携をとっている。かかりつけの看護とも報告相談しながら受診や対応の指示を受ける体制もとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には直ちに情報提供を行い。なるべくスムーズな入院対応ができるように努めている。病院の相談員や看護とも普段から報告、相談を行う中で関係づくりに努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に契約と重要事項説明と共に看取り指針の説明を行っている。まだ看取りの経験はないものの現に看取り支援を検討すべきことが持ち上がっており、今後の検討が見込まれている。	これまで看取り経験はないが、管理者と法人職員が看取りに関する外部研修を受けたり、他グループホームの実践例を聞く等して、今後は看取りに取り組む意向である。看取りは怖いことではなく、ケアの延長線上に必然的にあるものとして捉えるという研修内容を職員にも伝え、職員も看取りに関する意識が深められている。	看取りに関しては、悔いのない対応ができるよう研修を重ね、家族とも積極的に話し合い、医療面でかかりつけ医との信頼関係を密にし、時間をかけて真摯に取り組むことが望まれる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	施設内研修で緊急時の対応について学んだり、その時において、看護からの指導を受ける等している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に9月と3月に夜間と日中の火災避難訓練を行っている。訓練に際し、消防署員、近隣住民、運営推進会議のメンバーに参加いただき忌憚ない意見を出していただいている。	避難訓練の日に合わせて運営推進会議を開催。消防署員・近隣住民等に避難訓練を実際に見てもらった後、意見交換が行われている。特に、夜間は地元の協力が不可欠として、地元との関係強化が必要との意見が出されている。今年度、管理者が女性消防団員を引き受けたことで、地元消防団への働きかけがスムーズになるものと思われる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人生の先輩として尊敬の念を持って接することを気掛けている。しかし言葉かけも配慮しなくてはいけない場面もあり、朝の申し送り時に意識を高めるために「声掛けに注意する」旨の意思表示を毎日行っている。	トイレ誘導や入浴介助、食事介助の時、最も心掛けなければならないのは、言葉かけへの配慮だという認識を持ち、管理者は職員の日常のケアにおける言動に気配りしている。本人の生活歴や家族との会話の中から、その人の個性に合った声掛けや、馴れ合いにならない程度の方言、自分が言われたらどう思うか、自分に置き換えての声掛けができるように職員間の気付きや助言を促している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	その時の気持ちを大事に、やりたいことを阻害しないよう心掛けてはいるが職員主導の声掛けや対応が気になることがある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ご利用者が電話の希望や好みの食べ物を希望される時は出来る限り対応し、近隣の店にみかんを一緒に買い物に行くなど行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服の選定が出来る方は好みの物を着ていただけるように心掛けている。気分転換にネイルを施したりもしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材切りや注ぎわけ、食器洗いから食器拭きまで職員と共同で行っている。	メニューは法人の栄養課から提案されるが、入居者の希望によって、柔軟に対応されている。昼食は法人から届けられ、朝食と夕食は職員が交代で調理している。対面式の台所で、職員が豚肉を炒めながら入居者に「豚肉は好きですか？」と語りかける様子が見られる等、日常の親しい関係が伺えた。食事形態も様々で、とろみ食の人に職員が食べ物の一つ一つを「〇〇ですよ」と根気よく伝える介助が見られた。又、「おやつを食べに行こう」と銘打って近くの「食べ物屋」に行き、普段とは違った外食の楽しみ支援も行われ、入居者に喜ばれている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日の食事と水分量は確認し、調整を図っている。お茶や汁物が苦手な方に対しては固め食べる感覚で摂取を促したり、食事を小分けにして提供するなど工夫をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは確実に施行しているが、介助の仕方不足している部分は訪問される歯科衛生士に相談しながら行うようにしている。ブラッシングができる方へはまず自力を促している。仕上げ磨きをしないといけないが徹底出来ない面もある。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	尿便意がどのタイミングで来るかの把握を行い、訴えや誘導を逃さないよう対応に対応するよう努めている。	普通の布パンツで自立している人もあるが、転倒防止の為職員が付き添い、見守りをしている。排泄のタイミングを把握してその人に合わせた誘導の結果、入居前より改善された入居者もあり、家族のおむつ代負担軽減に繋がったケースもある。夜間帯は鈴の音や気配で察知し、ポータブル使用で失敗を防ぐ配慮が見られた。ポータブルはその都度洗浄し、清潔保持にも努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日の水分量の確保と毎朝の味噌汁に食物繊維を使用したり、下剤を検討する前にプルーンの提供行うなど各ご利用者に合わせながら対応を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	午前中の中入浴を希望される方がおらず、午後から毎日入浴できる環境を作っている。	自立入浴の人も、背中・足指等手の届きにくい所は職員が介助している。入浴前に、湯加減を確かめてもらい、「頭から洗いますよ」と声掛けする等、気持ち良い入浴となるよう心掛けている。毎回、本人の介助をしている家族が介助中、本人が転倒した事例があり、即、シャワーチェアの導入を図って家族の安心に繋げている。尚、お湯は近くの温泉源から引いており、毎回の入浴が温泉気分、入浴拒否の人は見られない。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	各ご利用者のご希望に合わせて臥床支援を行っている。ご自分のペースで日中休まれたり、テーブルで伏せておられるような場合には声掛け対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服の内容は処方箋を各職員で確認している。内服の内容変更や追加があった時も職員間で情報交換し、申し送りノートにも記載し周知している。降圧剤の変更あった時には血圧測定機会を増やし変化の把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居前の生活形態をご本人やご家族より情報収集をし、草取りなど楽しみと気分転換に繋げるよう努めている。嗜好品においてもノンアルコール飲料を活用して、楽しみある日々の環境作りに努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	その場その場での希望に添うことは困難な時もあるが、希望があり、その時の状況が可能であれば近隣の商店にご利用者と買い物に行く時もある。	年間外出計画があり、桜、アジサイの花見や紅葉見物等、季節に合わせた外出や、初詣、ドライブ等で気分転換を図っている。日常的には、近くの神社まで、職員が付き添って車椅子での散歩を楽しむ入居者もあり、希望に応じた柔軟な外出支援が行われている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現金を所持しておきたいと思われる方においてはご家族と相談しながら3000円程度で手持ちされている。ご本人のお気持ちに添いながら使用されている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	年賀状が来る以外は手紙のやり取りはない。ご本人が希望された場合は、すぐに職員がダイヤルし、そのまま受話器を渡してゆっくりと話していただけるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	過去においてあるご利用者がリビング空間を独占されることがあったが、その方が落ち着かれ、みな様が自由に過ごされる空間となっている。季節に応じた壁面作りを共同で行い、作品を通して季節を感じていただくようにしている。	玄関から入ってすぐ、木造りの椅子とテーブルが置かれた来客応接用の空間があり、続いて事務所・オープンキッチン・リビングと、ワンフロアで全てが職員の目が届く作りとなっている。リビングでは、職員が入居者と一緒にトランプ遊びに興じ、和気あいあいの雰囲気が見られた。ウッドデッキに続く空間にはゆったりしたソファが設置され、入居者は、自分が一番くつろげる場所で自由に過ごしている。テレビの側に簡易本棚があり、皇室写真集や童話、童謡等の本が置かれる等、家庭的な暖かみを感じられる共有空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	あるご利用者は自由に自室の片付けや掃除をしたいと思っておられるも単独での行動は転倒リスクが高いため支援が難しい時もあり、1対1での対応が必要となり、その方の気持ちに沿ったケアができない部分が多い。今後の検討事項である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に馴染の家具などの持ち込みを声掛けするも設置される方は少ない。タンスに限らず小物でも馴染の物を持ち込んでいただき安心へ繋がるよう働きかけが必要。	寝具・仏壇・整理タンス・テレビなど、どの部屋にもその人らしい物が持ち込まれ、「私の部屋」として安心して過ごせる居室作りがなされている。家族写真が沢山貼られた部屋や、家族からの年賀状や手紙がピンナップしてある部屋も見られた。各居室に共通して貼られていたのが、「母の日」に担当職員が書いた入居者への感謝状。「いつも笑顔を有難う」とか、「毎日、何かすることがあったらいいなはり」と言ってくれてありがとう等のメッセージが伝えられており、入居者と職員の信頼関係が伺えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	時間に拘りを持たれた時には居室内に大きめの時計を設置したり、安全に居室内で自由に過ごしていただけているように布団の畳み方や足元のマットの敷き方を工夫している。		